

科学としての哲学

加藤 正

現代唯物論の最大の不幸は、まだその哲学的方面が十分に仕上げられていないということである。この方面では、マルクスおよびエンゲルスをうけて、レーニンがもつとも大きい仕事をのこしているが、それはまだ序論的断片的であつて、本論へは達していないと、私は考えている。この現代唯物論の哲学の本論を書くということ、これがわれわれに課せられている最も重い問題の一つである。

世の中には、何か誤解があつて、現代唯物論というと、何か哲学みたいなものと思えるむきが多い。いや、みんながみんなそうだとと言っても、言いすぎでない。しかし、現代唯物論は「どこから見ても、もう哲学ではない」と、エンゲルスははっきりとのべている。哲学が「自然と歴史との実証科学に解消」したもので、それが現代唯物論であつて、それは現実の科学と「一重の世界観」である。自然と歴史との現実の実証科学が把握していないもの、そんなものはもはや現代唯物論の中にあるわけがないのである。従つて、現在の自然科学と社会および歴史科学と、そのほかに何か哲学めいた「現代唯物論」などがあるわけではないのである。

ところが、現代の流行は、唯物論を哲学につくりあげることに興味を感じている。少くとも、そう見える。プロレタリアートの「哲学」とか、人民の「哲学」とかいう言葉で、現代の唯物論を特性づけようとする試みが行われている。言葉というものは、ある程度まで便宜的なものだから、別にこの言葉だけに喰いさがらうとは思わないが、そういう「哲学」が現代唯物論を意味するならば、それはもはや現代の自然科学および社会・歴史科学を紹介解説

すること、それをおしひろげること、その科学の認識成果を直観的・観念的な思弁によつて歪曲しようとする試みに対してまもること、特に、人民層または労働者階級の解放の意義と条件に関する科学的認識をひろめること、それらの外にはないはずである。人民が持たねばならないのは、唯物論、つまり科学、つまり実証されるがままの現実の關係の把握であつて、もはや「哲学」ではない。人民の「哲学」がもし特権階級に対する人民階級の歴史的社会的立場に関する実証的科学以上を意味するならば、それはもはや言葉の濫用だけでなく、そこに何らか唯物論的でないものが意味されているのだ。人民的な立場での「物の考え方」というものが、特殊のにとり出されて、実証的な科学的認識とは別な意味づけをあたえられているのだ。でなければ、人民が自覚のために持つべき自己認識の科学を「哲学」と言い表わす必要がどこにあるか。

流行の意見によると、現代唯物論としての「哲学」は、実証科学のもっていないものをもっている。実証科学は個々の個別法則を研究するのに反して、哲学は世界の一般法則を研究する。科学は世界を個別的・特殊的研究するが、哲学は全体的・普遍的に研究する。ところが、エンゲルスは、個別科学のほかに「全体的関連に関するあらゆる科学」を不要としている。流行は、これに反して、総括または一般化としての哲学を必要とみなしている。そして、人間のそれぞれの階級に即して、世界に対するそれぞれの立場、従つてそれぞれ特殊な総括または一般化様式、つまり世界観または認識論があるという。言いかえれば、階級の数だけの哲学があることになる。現代唯物論は、そういう意味で、プロレタリアートの哲学である。もつとも、現在ではレッテルをはりかえて「人民」の哲学と言う。理論の党派性が没却されたみたいだが、まあ、それはとにかくとして、そういう哲学を欠いては、現在の実証科学は完全でないというのが、流行の意見であつて、科学をプロレタリアート（または「人民」）の哲学で指導するという問題もそこから出てくる。

では、流行からはなれて、現代唯物論としての自然および社会科学を考えると、もはやどんな意味でも哲学は

問題とならないかといえば、そうではない。科学の外から科学に与えられる哲学はもはや問題にはならないが、科学の中にあり、科学にそなわっているがしかし科学の対象とはなっていない対象、つまり科学的思考そのもの、それを研究し、その法則をあきらかにするものとしての哲学が問題になる。アリストテレスの論理学、カントの認識論、ヘーゲルの弁証法などは、それぞれの角度から、思考そのものの法則をあきらかにしてきた業積であって、この対象に関する研究を新しい意味で哲学とよぶことは不当ではあるまい。従来の哲学が思考の法則を分析した限りは、積極的な成果をあげた。つまり、思考に関する実証科学であった限りは、唯物論にとつて意味があつた。この成果をうけいれて、思考の法則をあきらかにしてゆく科学を、しきたりに従つて哲学とよぶことは不当であるまい。もちろん、思考科学とでもよんだ方が、もつとふさわしいかもしれないが。

こういう思考の法則をつかむには、何よりもまず科学そのものを一つの思考形態として、それ自身に分析してみることが必要であつて、これが行われぬ限り、われわれはその戸口にも到達していないのである。これが全面的に分析されたとき、始めて弁証法は、思考の法則の科学、眞の哲学として確立されるのである。そして、この仕事は、まだ本格的には遂行されていないのである。個別科学が研究する實在の特殊法則に対して、實在の一般法則を研究するというような立場で、思考法則は分析できない。實在の一般法則が思考法則として立てられるならば、それはもともと思考法則の實在への投影でしかなかつたのだ。それがあくまで實在の一般法則ならば、自然および社会科学によつて明らかにされるべきであつて、それ以外の仕方では明らかになれることはありえない。思考が實在を反映するということは、思考自身に法則がなく、實在の一般法則をとつてもつて自己の法則とするということではなく、思考が自分自身の法則に従いつつ實在を反映するということである。自然、歴史、思考に通ずる一般法則としての弁証法なるものを抽象すれば、それは単なる一箇の図式、一箇のサンマリ、一箇のインデクスにすぎないものであつて、通俗的説明には便利かもしれないが、それをそのまま思考の法則に転用することはできない。思考の法

則として生かすためには、そういうものとして具体化しなければならないのだが、そのためには、図式に肉づけしてもはじまらないのであって、あらためて思考そのものを分析して思考の弁証法を展開しなければならない。結局、出発点にかえるわけである。いわゆる「一般法則」の秘密こそ、実は思考の法則の中にあるのだ。

また、それぞれの階級に固有な「物の考え方」を想定して、プロレタリアートの物の考え方を分析してゆけば、唯物証法が展開されるというような仕方では、思考の法則を明らかにすることはできない。社会的人類の思考は、一つの同じ法則に従うのであって、種々な階級イデオロギーも思考が一つの同じ法則に従いながら、それぞれの条件に応じてとる形態であり、イデオロギーこそ思考の法則から解明さるべきであって、イデオロギーから思考の法則が解明さるべきではないからである。

以上の提言は、何もことあたらしい主張ではなく、十年以上も前に私の主張しつつつけたところである。「唯物論における哲学の問題」は、幾度か展開をお約束しながら果せなかった（『唯物論研究』昭和十一年四月号、十二年九月号、『唯研ニュース』六四号）。今もまだそれを十分になしうるわけではない。もうすこし専心しうる条件を得て、多少とも体系的な著書にまとめて世に問うことができれば愉快だろうと思うのであるが、私の健康はもうそれを許すまいと思う。そこでとりあえず、概略を覚え書きとして発表し、余を他日、（他日があれば）に期することにしたのであるが、病中閑なし、その覚え書きもいつ書けるともおぼつかないのにシビレをきらした編集者から、ある暗示を与えられたままに、十余年前の問題を新しく引っぱり出し、当時に不案内な読者のために、次に発表するはずの論文の前言とします。

（七・一八）

（『理論』第六号、一九四七年六月）

- 『加藤正著作集』第一巻（「加藤正著作集」刊行委員会、一九八九年一二月）所収。
- PDF化するにあたり、旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 dvi2pdfmx を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.ac.uk/hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。